品川区にも重度障がい者が入居でるグループホームを!

区長の「7つの重点政策」のひとつ「障がい者向け100名分の整備」は、数の上では達成しています。しかし、重度障がい者が入居できるグループホームが少ない、という現状は変わらず、やむを得ず、他区や遠くの自治体の施設に入居しているのが実態です。

民間の事業者でも、例えば品川区の土地の無償提供を受けてグループホームを作った場合などでは、入居者選考の際、区が積極的に関与して重度障がい者受け入れを進めるべきと求めました。一方で、重度障がい者の受入れには手厚い人員配置が必要であり、適切な財政的な支援も求めました。

今後、事例のような場合も含めて、他自治体の事例なども参考に整理をする。また重度障害者の受入れへの財政的支援は、2025年度より中重度障害者受入助成を創設して対応しているが、今後さらに障害支援区分5、6のより重度の方の受入れが進むよう総合的に検討する、と答弁。これまでより一歩進んだ印象ですが、引き続き提案していきます。

羽田 新飛行ルートは止め 元の「海上ルート」へ戻せ

区長が、積極的に国土交通大臣と会い、羽田新飛行ルートの固定化回避に向けて、海上ルートという言葉を国交省から引き出したことは評価するものの、国交省は「従来の海上ルートに戻す」とは言わず、滑走路も「AC滑走路を使う」前提です。だとしたら、都内他自治体の騒音は軽減されても、羽田空港に近い品川区においての騒音は変わりません。しかも、国交省が考える海上ルートの前提であるRNP−AR方式（※）の実現には対応できる機材が不十分なこともあり、かなりの時間を要します。

この現状を踏まえ、区長にはさらに踏み込み、「海から入って海から出る元の海上ルート」を国に求めるよう主張しましたが、「区が求める海上ルートの実現に資する方策は、必ずしも国が示すルートに限定されず、区民負担軽減への取組を求めるもの」という歯切れの悪い答弁でした。

国が羽田新飛行ルートを掲げた当初の増便目標が従来の飛行ルートですでに達成できていることは、国交省が示すデータで明らかになっています。

つまり新ルートの必要性の根拠はすでになく、区は今こそ「海から入って海から出るという元の海上ルート」を国に求めるべきです。

（※）GPSなどの精密航法を用いて、障害物を避けながら精密な曲線進入を可能にする高度な航空進入方式

なんでも相談のご案内

『区政なんでも相談&おしゃべり会開催中』

毎月第3土曜日（11～15時）開設しています。
区政に関すること、くらしの中の困りごとや疑問などお気軽にご相談ください。
Mail：shinagawa@seikatsusha.net

■あなたの声を区政へ!ひとこと提案募集中

COLUMN

■待ったなしの対策が必要な夏の猛暑

今年の夏も酷暑となりました。7月28日は、震度7を観測した熊本地震はライフラインを破壊する大惨事となりました。さらに連日36度超えの酷暑が被災者の生命を危険にさらしています。

消防庁は全国の熱中症による救急搬送者数を毎週公表しています。速報値で7月27日～8月2日は9,180人。死者は7人、重症者は219人です。発生場所のトップは住居の3,911人で屋外の1.4倍。夏の猛暑はもはや災害であり早急な対策が必要です。

■品川区の“都市戦略”として、本気で気候危機に向き合おう

前回の区議会報告レポート（No.143）でも掲載しましたが、区の新規事業に暑熱対策都市戦略（仮称シェードポリシー）が予算に反映されました。区と企業・団体等をつなげ、社会課題の解決をめざす「しながわシティラボ」のしくみを通して、暑熱対策の第一弾実証実験に、大井町トラックスにパッションフルーツのグリーンカーテンが設置されました。

シェードポリシーは都市計画課が所管します。まちづくり計画が気候危機に向き合い、市民の命と生活を守る計画に転換していくことを期待します。

武蔵小山再開発エリア・かむろ坂・林試の森公園にて①コンクリート地面②コンクリート地面と植樹③土の地面と植樹の3つにポイントを絞り、日なたと日陰をWBGT計（※）で調査

（※）気温・湿度・輻射熱を統合して熱中症リスクを評価する「暑さ指数（WBGT値）」を測定する機器。

■緑の力を見直そう

街路樹の緑陰(日陰)と日なたの歩道、日なた(日傘利用)をそれぞれ歩いて、街路樹の暑熱軽減効果を検証する実証実験(※)があります。この結果によると、日傘と日陰は太陽の直射光が軽減でき、日陰は路面の反射光と輻射熱の影響も軽減できるメリットがあり、効果が最大でした。日陰は歩行直後に全身の体表面温度も低い結果となっています。

区内の道路で街路樹の植栽スペースの確保は課題があるため、既存の街路樹や民地の緑地をいかに効果的に活用するかが重要です。

日陰以外にも、防火効果が高い植樹を学校や区有施設等で拡充することなど、緑を増やす施策を提案していきます。また、民地の緑地拡大に向けて、樹木の保存や植え替え、剪定等で発生するごみ処理の支援など求めていきます。

(※)川崎市環境総合研究所「街路樹の緑陰（日陰）による暑熱軽減効果と熱中症予防について」を参照

編集後記●今夏も「酷暑」だ。野放図に「環境」から収奪してきた人間の営みがその一因であるのは間違いないが、根本的な解決策を提案できないわが身の無力を嘆くばかりだ。それにつけても、初めての「酷暑の大震災」を経験された熊本の皆さまには、何とか酷暑を乗り切っていただきたいと切に願っています。